

1.10. ウィーン便り (10)—— 国際原子力機関 (IAEA) に勤めて：旅にまつわる話 (2002.10) ——

ウィーン滞在満七年が過ぎた。その間に出掛けた処は多い。中国敦煌やインドのアジャンタ、エジプトの古代遺跡には別項で触れた (第四編)。その他にも業務上、異文化圏での公務の機会が持てた。そんな地での印象は新鮮である。今回はその旅から話題を拾った。

・アラブ首長国連盟アブダビと「酒」(1995年10月)

初のイスラム圏への公務出張である。着任直後でもあって印象は多いが、「酒」について書く。私は酒好きである。原則として毎晩呑む。その私が禁酒の国への出張である。「ホテルでは呑める」と聞いて安心して出掛けたが期待はずれた。パーティも酒抜きである。三日目頃から「飢えて」きた。街中を探してもそんな店はない。ホテルのフロントで遠慮がちに尋ねたが、要領を得ない。普通の人には酒という文化がないらしい。四日目、もう我慢ができずホテルで管理人風の男に尋ねた。「この先のビルを左に入れて…」行くとあると言う。早速でかけた。行きつ戻りつ探すが見当たらない。道行く人をつかまえては「酒、酒、酒」と聞きまわるとも気がひけたが、飲みたい気持ちが勝った。三人目に英語の通じた営業マンらしいのが教えてくれた。



行くと看板も店名も何の目印もない倉庫風の建物。これでは歩いて探しても分らない、と思ったがそれも当然、酒は非売品なのだとな納得。店内には、「あった、あった」懐かしい酒の瓶が。買い物籠はたちまち一杯。早くホテルへ戻って、と喉の潤いを押し殺してカウンターへ急ぐ。「購入許可証は？」何それ？「ない人には法律上売れない」どこで手に入るの？「知らない」の返事。少々大袈裟だが絶望的になる。しつこく尋ねると店長が「国務省に行け」どこにあるの？「さて？」と彼も考えこんでいる。挙げ句の果て「空港にはある筈」とのたまう。さすがの私も今度は「面倒くささ」が勝って酒は諦めることにした。

そんな訳で、一週間の断酒となった。「これを機に休肝日が習慣づくか」と期待したが、帰国の機上で元の木阿見。缶ビール半分で酔った。うまかった。要するに酒が好きで、止めようとする精神的姿勢が無い。それに、酒はうまい。うまくて好きな酒を「止めよう」と無理に努力するのが不自然なのだ。「好きなものは好きでいい、要は自然体で」と親鸞和尚も言っている、と生意気な「悟り」で以来再び連夜の酒が続いている。

・カザクスタンのアクタウ空港と「荷物」(1996年10月)



カスピ海東岸のアクタウには 1999 年春まで高速炉 BN 3 5 0 に併設の原子力海水淡水化施設が稼動していた。公務でその空港にモスコア経由で深夜到着。乗客の多くはアジア系の顔つきだ。カザクスタンとはアジアの一部なのだ。初の訪問だが、私の名前を書いた紙をかざした人が迎えてくれる。さて荷物の受取り。「空港ビルのコンベヤーで自分の荷物を受け取って…」と心の準備をしていた。が、迎えの人は自分の車でずっと離れたビルの前まで移動し

てそのまま止まって動く様子がない。闇夜の中に同じように何台か車が停まっている。言葉が通じず状況がわからないまま待つこと三十分。運転手に促されて建屋に入る。倉庫だ。その中央に乗客の荷らしいものが山と積まれている。その中から「勝手に」自分の荷を探して取り出せと言うことらしい。ベルトコンベヤーを予想していた目には一瞬「??」。こんな深夜、誰だって早く家に帰りたい、誰だって早く自分の荷物が欲しい。結果は想像通りである。上から順序良くと行く筈がない。積み木崩しのように山が崩れていく。怒号が乱れ飛ぶ。言葉の通じない人の間で一瞬絶望的になった。「外交官待遇」がこの時効いた。私の荷物は別の場所によけてある、と運転手が指差してくれた。あった。部屋の隅に別置ききのテーブルの上に。荷を取って、これも「外交官待遇」のレーンから税関処理を済ませることができた。

・トルコで「うたかたの億万長者」(2000年4月)

正直なところ、この国への認識は低かった。その昔広い地域を席卷したオットマントルコ、つまり悪い表現だが「未開」のイメージだった。ウィーンも二度襲われている。「トルコ襲来」の跡は構築物にも語り種にも残っている。が、日本の親しい知人から話を聞いて行く気になった。久しぶりの純粹レジャー旅だった。訪れて認識をあらためた。変な話だが「トルコにもギリシャがある」と思った。世界史でかつて学んだヘレニズム文化はギリシアの地に花開いたものと思い込んでいた。遺跡エフェソスやベルガモ、トロイを訪ね、地下都市カッパドキアを歩いた。

初日の空港で億万長者になった。多額の現金は禁物と三万円余りを両替したら億に近いトルコリラを受け取ったのである。大金持ちの気分だった。単位の違いを忘れれば、あの三億円事件に近い額面の現金である。かなり嵩張る。不安になった。が、勿論なくなるのも早い。日本への絵はがきに貼る切手が三十万リラである。億万長者の気分ははかなく消えた。

カッパドキアの入り組んだ地下都市で偲んだ往時の生活の感慨も忘れ難いが、エフェソス遺跡の大劇場でかつての剣士対猛獣の闘いを想像し、ベルガモでは借景の極致とも言うような山肌の野外劇場の観客席から舞台越しに海や対岸を見下ろして舞台の俳優を想像した。トラヤヌスとかアドリアヌスだのなじみのある名前の記念碑に出くわし、アクロポリス宮殿跡で大小の彫像を見歩きながら大理石の破片をポケットに入れた。何れこの思い出の石を彫りたいと思った。彫刻は「書」と並んで幼い頃から興味があった。その気持が蘇って来た。



(クレオパトラも歩いたという道に建つヘラクレスの門)

トロイでは、伝説の「木馬」を信じて遺跡を発見したシュリーマンを偲ぶ。トロイ戦争は美女をめぐるの叙事詩と言われるが、真因は海の漁業権を争っての経済戦争だと地元のガイドが言っていた。最後はイスタンブール。グランバザール、ブルーモスク、オリエンタル急行の終着駅シルケジュ。夜は魚とワイン。翌朝は欧亜を隔てる小雨のボスポラス海峡を歩いてから帰途の空港に向かった。

・「鱈酒」の好きな「変なエジプト人」(2000年3月)

「ふぐの鱈酒」がエジプトで飲める訳ではない、日本でのことである。招待を受けて松山での原子力学会に「海水淡水化への原子力利用」と題してIAEAの活動報告をした。その機会に、エジプトの担当者二人に「エジプトのプロジェクト概況」の学会発表と、愛媛県と佐賀県で稼働中の「原子力淡水化施設訪

問」をアレンジしたときの事である。

羽田で二人と落ち合い松山に飛んだ。夕刻、街へ食事に出た。「飲み屋に行きたい」と言う。敬虔なモスLEMなら酒は飲まない。が一人は無宗教、一人はクリスチャンで酒は問題ないと平然としている。小さな割烹に入って、「彼らに食せそうな刺身、鮓」と「冷酒」を頼んだ。私は好物の「鱈酒」。美味しそうに飲みだしたら「お前は何を」と聞く。「これは香りが強い、お前には向かない」と言っても興味は消えなかった。「一口吞ませろ」「こっちの方が旨い」「俺もこれが欲しい、冷酒はいらない」となった。

翌日、多少仕事の関係のある日本人が別の、より立派な割烹に招待してくれた。女中さんの「お飲物は」との質問にくだんの二人、「昨日のあれを貰ってくれ、あれがいい」「何ですか、昨日のあれとは」と尋ねるホストに事情を説明すると思わず「変なエジプト人だねえ」。

・インドネシアの「ボロブドゥール遺跡」(2002年2月)

公務は韓国とインドネシアの原研の共同研究会議だった。世界的なテロ不安の時期で、暴動情報も耳に入る国だったから緊張した。が、ジャカルタでの公務期間中は仕事先の係りが同乗する車で移動と、会議室での「閉じた」空間での生活で何事もなく済んだ。終わって、仏教遺跡ボロブドゥールを訪ねた。

ボロブドゥールはジャワ島中部ジョクジャカルタの北に残る大規模な仏教遺跡である。八、九世紀の建造間もなく、モスLEM到来で仏教は東に移り今はバリ島にその文化が残っている、と言う。世界七不思議の一つである。階段状の十層建ては、煩悩から涅槃の世界までの過程を意味していると言う。下の階層から



順に登る。各階層の回廊には夥しい仏像、釈迦誕生の物語、ヒンズーの神々が処狭しと壁を被っている。壁画ならず壁像とでも言えば良いか。下層部が方形の階層なのに対し、涅槃の世界である上層部三層は円形である。大きなストゥーパが最上部に建つ。その下には壁の像に替わって等身よりやや大き目の仏像が「祠」に座している。各釈迦像はそれぞれの段階での悟りの内容、誓願を表す手指の形（印相）を持っている。多くは「祠」に納まっており、小さな「窓」から手を入れて像

の手を触れて唱えれば願いが叶う、と聞き私も手を伸ばして願をたてた。

・パキスタンとガンダーラ (2002年3月)

「あの」同時多発テロから半年、正直なところ「不安一杯」の単独公務出張だった。「断われないか」とも内心考えた。訪問地は国連安全係が認める三都市（カラチ、イスラマバード、ラホール）だった。常識不足が「不安」を増長した。カラチ空港に深夜到着して、膝まで伸びる白い民族衣装の男性姿にタリバン、アルカイダが重なるのである。豊かな顎髭があるとその頭領に見えてくる。翌早朝「一人ではホテルから出るな」と、現地国連事務所の担当官から指示を貰った。カラチでの公務を終えて飛んだ首都イスラマバードの空港には「国連」マークの機体やジープが見えて再び緊張した。そこでの公務の合間を縫ってタクシーラと言う遺跡に案内してもらった。

ここでパキスタンに対する私の感情は一変する。あのガンダーラ、カラコルムへの入り口だった。勿論そこまで足を伸ばす余裕はない。僅か一時間余りの駆け足で味わえるのはほんの一片である。「再訪した

い」気持ちに襲われた。この気持ちはその後も消えない。

「印パ国境の町訪問」も印象的だった。最後の訪問地ラホールは仏教流布のルート上に近い古い街である。今も幹線道路が両国を結び、平時には公共バスが往来する要所である。夕方、車は小一時間で国境の「関所」に着いた。紛争中の現在、「関所」は閉鎖されている。総官相当の人が「これから儀式が始まる、どちらが上手かあとで聞きたい」と謎めいて話す。両側に人だまりがある。間もなく歌声が高まり、手持ちの国旗を振り上げ、シュプレヒコールがこだます。言葉が分らないのでデモ隊の罵り合いにも聞こえるが、雰囲気から「交歓の場」であることは分る。国境閉鎖中だから、人の往来はない。が、両側で民衆が唄の交換をし、国旗降旗の段取りは両側守備隊がリズムを合わせて対象的に同時進行する。国旗が降ろされ、両側で「万歳」とも言える締めくくりで約三十分の儀式が終わった。国境両側の民衆が相呼応してのエールの交換に、民衆は平和を欲していると肌で感じた。「平時再訪」の気持ちが強まった。



・ブエノスアイレスでの「拘り事件」(2000年12月)

公務を終えて[南極大陸への旅](#)に向かう前日の午後、街を歩いたあとホテルへの帰途にやられた。見事な手口だった。建物脇の工事用足場の間をくぐるように足を運んでいた。頭に「何か」を感じた瞬間、「鳥の糞だ」と母娘連れらしい二人の女性が近づく。「鳩か」と上を仰ぐと同時に「早く水で」と体のあちこちの水洗いを「助けて」くれる。一通り済むと二人は車で去った。私はホテルに急いだ。体とシャツを洗い、気分直しに一杯やるかとリュックからバッグを取り出すと半開きになっていた。「おかしいな」と中をのぞくと、あるはずの現金が消えていた。キョトンとした。

トラブルに気付いて、他の被害品を確認する。現金の五十ドルは授業料と諦めたがクレジットカードがない。フロントで事故処理を頼んでいる間に気付いた、「あの女二人組だ」と。小一時間が過ぎていた。「落とし物」を洗い落とすのを助けるように、娘はティッシュで肩やシャツを拭ってくれた。その間に母親は私の背にあるリュックの中で「仕事」をしていたのだ。俺を「助けた」あと二人は車で消えた。あれは、成果の獲物を早く安全な場所へ移すための車だったのだ。走り去る車に「お礼」の手を振ろうとした自分の人のよさが滑稽で仕方がない。

おまけがついた。クレジットカードが悪用されていることを二週間後ウィーンで知るのである。銀行口座の引き落とし結果を見て驚いた。記憶にない1000ドルが落ちていた。まさしくあの日、品名にも店名も地名にも心当たりがない。盗難届をするまでの一時間の間に使ったらしい。これは何とかならぬかと銀行に相談。「被害証明」がないと駄目だと言う。50ドルをすぐ諦めたため現地の警察に届けていなかった。が、1000ドルを諦めるのはためらう。銀行の勧めでウィーンの警察に出向いた。「国外での事故証明までは出せない」と最初は断られた。銀行員の人脈で紹介をもらった別の派出所が書類を作ってくれた。何とか書類を調べて銀行へ提出。一ヶ月後、カード会社から連絡があって約900ドルが戻ってきた。

以下、身近で起きた旅先でのトラブル事例。読者に再発のないことを祈る。

- ある知人のギリシャでの経験。空港出口で「麻薬持ち込みの検問中」と旅券と財布を点検された。そのまま全品受け取ったつもりで宿に着き、現金が抜き取られていることに気付いた。
- 別の知人。褒賞休暇で欧州各地を歴訪した。最初の寄港地で手荷物が紛失。航空会社に尋ねて所

在は分ったが、荷物は移動する本人を追い続けるだけで手元に戻ったのは日本帰国後。

- 中堅の日本人職員。公務の後アムステルダムのとあるレストランに入った。居合わせた外人が自から一片を口にしたケーキを勧めた。一口食べて急に眠気に襲われた。気が付いたのは翌朝病院のベッドの上。もちろん懐中の金はない。目覚めるまでの経緯は本人も知らないという。
- 「生物化学兵器」的な被害も有り得る。「脂漏性湿疹」と称する頭部の皮膚障害に二度罹った。かなり強烈な痒みに悩まされた。脱毛もした。抗マラリア剤の副作用らしいと犯人を突き止めるのに二年要した。

「人生は百代の過客にして」と言ったのは芭蕉だったか。旅で出会った人、文化、自然。旅は気持ちを新鮮にし、新しいものを発見、古いものの良さを教えてくれる。今後の人生の旅もこうであって欲しい。